

Number.FOUR
2003.冬

「インターネット」の普及により、情報の流通が急速に進んでいる。この中で、情報の信頼性が重要な要素となっている。本号では、情報の信頼性を確保するための取り組みについて、いくつかの事例を紹介する。また、情報の信頼性を確保するための取り組みについて、いくつかの事例を紹介する。

「インターネット」の普及により、情報の流通が急速に進んでいる。この中で、情報の信頼性が重要な要素となっている。本号では、情報の信頼性を確保するための取り組みについて、いくつかの事例を紹介する。また、情報の信頼性を確保するための取り組みについて、いくつかの事例を紹介する。



INTERVIEW

原田至郎助教授 インタビュー

「ちょっと肩入れすると、のめりこんじゃうところがあるんです。文字コードのこともそう。理性的というより感情的なのかな」との自己評価。クメール文字コードの問題を、原田助教授に聞いてみた。



クメール文字の文字コード問題を扱うことになった、そもそもそのきっかけは？

たまたまなんですが、僕が博士課程時代に非常勤の研究者をしていたアジア太平洋研究会という財団から久しぶりに声をかけられたんです。「アジアの国の中には、まだコンピュータで自分たちの文字が使

えないところがある」という問題を扱うから、メンバーに入ってくれ、ということで。かつて財団のコンピュータ関係の世話をしていたことを見込まれたらしいんですね。それが、きっかけです。

その後、深く関わることになったクメール文字コードの問題とは？

1999年に初めてカンボジアへ視察に行っていて、現地で使われているクメール文字が、コンピュータ上では正しい形で見えず、入力もデータ交換も面倒だということがわかったんです。それを改善するために、カンボジア出身者を含むメンバーで策を考えました。当初は、実装は外注する予定だったんですけど、お金が取れなくて、僕がプログラムを組むことになったんです。2000年1月にブノンペンで開催された国際クメール学会でそれを発表したところ、幸いとても好評で、カンボジア政府からも評価され、僕たちの提案をベースに、まずは文字コードの国内標準を制定するお手伝いをし始めたんです。

ここからが問題なんです。実は、カンボジア政府も知らないところで、クメール文字コードの国際標準が既に決められていたことが判ったんですね。これは、ネイティブ・ユーザーを入れずに外国人だけによって作られたもので、様々な誤解に基づいているものでした。カンボジアが公式に抗議して、当然すぐに修正してもらえんと思っていましたが、とんでもなかったですね。ISO/IEC JTC1/SC2/WG2の会議や、ユニコードの会議に文書を送

たり出席したりしたけれど、一度決めたものは変えられないと繰り返され、時には怒鳴られたりしたんです。結局、一部の要求は認められたものの、クメール文字の特徴に関わる最も中心的な要求は認められませんでした。WTO-TBT協定などで、国際標準を決める時は、特に途上国に配慮して、全当事者の参加を求めることが、大きな規範としてあるんですけど、それが守られずに起きた問題なんです。

この問題に関わり、ご自身の研究活動に変わったことがありますか？

めちゃくちゃ大いにあります(笑)。僕はもともと、国際政治で武力紛争のことをやっているんです。統計分析をやったりして。でも現場を見ているわけではないんですね。もちろん戦場に行くのもコワイし。それが一度、現場を見ようと、現場を知らずに書くことの難しさを感じましたね。「百聞は一見にしかず」で、その場の空気を感じたか否かでは全く違うんです。もちろん、部外者が書くことに積極的な意義もあると思います。ただ、具体的にみんなに影響を与えるような政策に関わることになったときには、凄く怖さを感じました。これが現場なんですね。

それと、国際関係とは、決して政府と政府だけの関係ではない、それ以外のいろんなアクターも一緒に形作っているのだなと。特に、科学技術に関わる分野では、国境を越えた専門家のネットワークで決まっているようなところがあり、またNGO/NPOが果たす役割もある。国単位で見えたら捉えきれない、ということ再認識しましたね。

最初は単なるボランティアのつもりだったんですけど、専門の国際政治に、こんなにはねかえってくるとは思ってなかったです。現場に行けたし、non-governmental actorの実態や重要性を認識できた、新しい分野や視点に目を開かせてくれたし、結果的にはかなりプラスになったと思いますね。

文字コードの問題は、文化にも大きな影響を与えることがあると思っているんです。先日、東欧からの学生と話をしたんですけど、インターネットを使うようになってから、文字の書き方が変わってしまったって言うんですよ。カンボジアでもそうなんです。既存の文字コードやその実装で書ける文字しか使わなくなり、それが伝統的な文字の形、書き方と異なっても、堂々と新聞や、雑誌、教科書に使われているから、子どもたちだってそれが正しいと思って

海外からのレポート

海外修学中の方からのレポートです。この秋からの海外、「本格的な活動は、これから」という二人ですが、どのような経緯で海外で学ぶことにしたのか報告していただきました。

鳥羽 美奈子(原島・苗村研D1)

Ecole Centrale Paris(フランス)

Ecole Centrale Parisは、フランス・パリの南側郊外に位置する工科大学です。フランスの教育制度でいうと、グランゼコールという種類の大学になります。私は現在、こちらの応用数学科の研究室に在籍しています。

留学の直接のきっかけとなったのは、東大工学系研究科の国際交流室による提携大学留学制度説明会です。漠然と留学に関心はあったので聞きに行ったのですが、Ecole Centrale Parisで修士課程相当の1年間のコースワークがあるということを知りました。私は既に博士課程に進学していたのですが、基礎力に不安があったこともあってこの内容に興味を持ち、出願しました。新領域や学際情報の学生でも工学系に関連する研究室の学生は出願出来るそうですので、興味のある人は国際交流室を訪ねてみると良いでしょう。

実際にフランスの大学に来てみると、私は既に修士号を持っているということでコースワークで

はなく研究室での研究を、望むならばコースワークの授業も聴講できるということをはほぼ決定事項として勧められ、その形をとることになりました。専攻は電子・情報を希望していたのですが私が専門としているVirtual Realityの3次元画像はこちらでは応用数学であるなど、コース自体も元々希望していたものとは少し違ったものになったのですが、とりあえずスタートして3ヶ月が過ぎました。最初の2ヶ月はやはり生活するだけで大変だったのですが、最近は少し慣れてきたようで、平日は研究室でこちらで行われている研究について学び、友達も出来て休日は食事に誘ってもらったりしています。

私はフランス語自体もおぼつかなく、1年間という期間でどれだけ成果のあることが出来るのかは未だ全くわからないのですが、この機会を充実したものとして生かしていければと考えています。

松村 誠一郎(荒川研D1)

Koninklijk Conservatorium Institute of Sonology(オランダ)

9月からオランダのKoninklijk Conservatorium Institute of Sonology(ハーグ王立芸術院ソノロジー研究所)に留学しています。ここは電子音楽や実験音楽・音響制作のための組織で、その研修コースには世界各国から集まった学生、研究者、アーティストが在籍して授業を受けています。講義はすべて英語で行われ、電子音楽の基礎から応用に関わる内容です。ここでは新しい音楽の形を模索することが重要であり、学生ひとりひとりが挑戦しています。授業ではそのためのヒントを与えるという姿勢を一貫して取っています。つまり、先生が興味を持ちつづけてきたトピックと長年の経験で体得した技術、知識を公開し、学生はそれを受けて自分の中に吸収するものを選択、作品に反映させていくのです。

私がこのInstitute of Sonologyに留学したきっかけは、毎年"DSPサマースクール"(岐阜、IAMAS主催)に参加したことに



あります。来日したInstitute of Sonologyの方が非常に面白い講義を行っていました。1年半前にアイルランドでの国際会議でその講師の方に再会したのをきっかけにコンタクトを取り、留学の意志を伝えて詳しい内容をメールなどで尋ねました。今回の留学費用は、幸運にも合格した文化庁新進芸術家海外派遣制度によってサポートされています。現在はようやく生活も落ち着き、いよいよこれから本格的に制作を開始するといった感じですが、

清原 聖子助手

はじめまして。私は、「情報社会分野」の新任助手で、濱田先生の研究室に所属しています。こちらへ来るまでは、慶応大学大学院法学研究科で、現在東大大学院法学政治学研究科教授の久保先生にご指導いただき、アメリカ政治の研究をしていました。また国際通信経済研究所では、主にアメリカのデジタル・ディバイド解消政策について共同研究を行って来ました。現在、アメリカ政治の立場から現代アメリカの通信政策をめぐる政治過程の研究に取り組んでいます。どうぞよろしくお願いたします。



小林 真輔助手

皆様、はじめまして。10月16日より坂村研究室の助手として働くことになりました。ここに来る前は、大阪大学にて学部、修士課程、博士課程を修了した後、今年の4月より特任教員として働いておりました。主な研究分野としては、コンピュータ・アーキテクチャ、LSI設計手法、組み込みシステム、コンパイラなどになります。今後はユビキタスネットワークにおけるシステムの研究にチャレンジしていきたいと思っています。東京での生活も初めてということもあり、いろいろわからないことが多いので、何かとご教授いただければ幸いです。よろしくお願いたします。



着任助手紹介

今年度、着任した助手の方の自己紹介です。

坂田 邦子助手

社会情報研究所から流動助手として異動してきました。学部時代は国際関係学を専攻していましたが、社会人経験、イギリス留学など紆余曲折を経て、現在は、アジアにおけるメディア文化とメディア実践に関する研究をしています。最近では海外と共同で映像制作のプロジェクトを行うなど、頭よりも身体を酷使しながらがんばっています。趣味はテレビを見ることと世界中のおいしいものを食べることに。どうぞよろしく！



竹之内 禎助手

東京生まれの地方育ち。北海道には7年いました。法政大学哲学科、図書館情報大学(現筑波大学)大学院で情報の思想・学説史を中心に勉強してきました。博論ではハイデガー、ガダマーの流れを引くドイツの情報学者ラファエル・カプーロの議論を扱いました。学生時代に一年間休学し、ドイツに住みながらオランダ、ベルギーまで時速二百キロで「通勤」していました。愛読書はV・E・フランクルで原書も集めています。よろしくお願いたします。



宮尾 祐介助手

現在は、自然言語の言語学的・数理的モデルをコンピュータ上に実装する研究を行なっています。自然言語は、人間の知的活動において絶対必要不可欠なものなのですが、あまりにも当たり前の存在のため、その重要性が一般にはあまり認知されていないところです。特に私が研究している計算言語学とは、コンピュータというツールを使って、言語のモデル化、さらにモデルの科学的検証を実世界データで行なうというとても興味深い分野だと考えています。



あかちゃんプロジェクト

アフォーダンスの動画データベースの構築

東京大学大学院情報学環教授 佐々木正人

AKACHAN GAKUJI

環境 — 身体系メディアを創る

「あかちゃんプロジェクト」は学外スペースの入口に陣取っています。メンバーは6名の院生(学府2、教育学研究科4)と佐々木です。内容を紹介します。

ほぼ2年前、第1子が誕生した2家族に「あかちゃんにまつわる日常の出来事をDVカメラで記録してください」とお願いしました。週1時間ぐらい、着替え、食事、入浴、遊び、訪問、外出などがご家族によって記録されました。テープは100本を越えました。はじめは仰向けに寝かされて、からだのあちこちを揺らしていただけたあかちゃんは、いまはスプーンで食事をして、公園でボールを蹴って遊んでいます。変化は目ざましいです。

ヒトは変わるものであり、変わらないものです。変化と持続、二つが渾然と一体になって、一人のヒトの個性が成立します。この現象を心理学では「発達」とよびます。「発達」を理解することはなかなか難しいことで熟練が必要です。変化の原因や、持続する構造、それぞれについての研究はありますが、その二つを同時に扱える理論もないし、「発達」そのものを表現する方法もまだありません。

たくさんのDVの中には「発達」が記録されているはずですが、それに誰でも容易にアクセスできる方法はないものかと考えました。そして昨年「映像データベース」をつくらうと思い立ち「あかちゃんプロジェクト」が結成されました。映像のサンプリングに工夫を凝らしています。私たちが議論を重ねながら蒐集しているのは「行為と環境が一体となった単位(アフォーダンス)」です。

たとえば「段差 移動」という単位があります。頭がすわるとあかちゃんは全身をひねって自分で寝返りを練習し



ます。なかなかうまくいきませんが、ベビー布団と床のわずかな「段差」が回転をうながして、成功することがあります。初期のはいはいは、もたもた遅いのですが、畳とフローリングの部屋の十センチぐらいの「段差」を降りようとする時に、はずみがついて思わぬ速度がでることがあります。あかちゃんはそういう機会に両手足の協調のリズムを創発するようです。立って歩きかけを与えるのも「段差」です。立ったときにちょうど手を置く、座卓表面、階段の一段目、ソファの座面などの高さを使って、立ち姿勢のバランスが徹底的に練習されます。これらはほんの一例ですが、地面との様々な高さの差が新しい移動方法の獲得をうながしています。段差には移動のアフォーダンスがあります。

たとえばこのデータベースの利用者が「段差」というキーワードをクリックすると、段差の周囲であかちゃんに起こった、数十秒から数分の行為が画面に何十も登場してくる。そういう動画データベースをつくりたいと思っています。

床(地面)、壁、穴、衣服、ヒモ、遮蔽、液体、顔.....など、キーワードは増えつづけています。これらの言葉の意味がこのデータベースではあかちゃんのたくさんの行為で定義されるわけです。映像規模は1000くらいにはなる予定です。

子どもに興味のある方はもちろんですが、ロボット研究者、建築家、アニメーターなどの皆さんにも使ってもらいたいと思っています。言葉ではなくて「視覚による心理学」の試みのつもりです。データベースにもビジュアルにも詳しい学環・学府の皆さんからのご示唆がいただければうれしい限りです。



PROJECT



Akachan Project

写真選択：高橋綾 教育学研究科博士課程

FIT2003論文賞受賞(苗村研)



苗村健助教授、
寛康明氏(苗村
研M2)飯田誠
助手(工学系研
究科)が手掛け
た研究論文「イン
タラクティブ

な多人数用方向依存ディスプレイ
テーブル Lumisight Tableの提案」が
9月10日~12日札幌で行われた第2
回情報科学技術フォーラムで、
FIT2003論文賞を受賞した。この
“Lumisight Table”は、1つのディ
スプレイを囲んだ4方向にいたるユー
ザーが、それぞれの向きにあった情報
を見ることができるといったもの。
これまで、ユーザーごとにディス
プレイを要したが、1つのディス
プレイで複数方向の向きにあった情報を
映し出すことができる。発表原稿は
URL : http://secure.gakkai-web.net/gakkai/fit/cd/html/event/pdf/LK_012.pdf

松浦幹太助教授、江波戸謙氏
(松浦研M2)論文で賞受賞

10月22~24日、東京で開催された
Network Security Forum 2003
において、「情報セキュリティ・マ
ネジメントの制度設計」田中秀幸助
教授(社会情報研究所)、松浦幹太
助教授共著がNetwork Security
Forum 2003論文奨励賞、「情報セ
キュリティ分野における産学連携の
状況」江波戸謙氏(松浦研M2)、松
浦助教授共著が同佳作に選ばれた。
この賞は、このフォーラム開催にあ
たり、NPO法人日本ネットワークセ
キュリティ協会、日本セキュリティ・
マネジメント学会が、今後必要とな
る技術、管理・運用、法整備などネ
ットワークセキュリティ技術に関す
る論文を広く募集、その中から選
ばれたもの。

GAKKAI
GAKKAI

NEWS

2003 NUMBER.FOUR

「学環・学府」は、情報学環の日々の活動を、より多くの方に
知っていただくものです。企画室では、研究室の活動報告、
イベント予定など、あらゆる情報をお待ちしています!

学環講話会「異能のひとシリーズ」



10月に開催
された第9回学
環講話会は、テ
レビCM制作プ
ロデューサー中島信也氏を迎え、「楽
しいテレビCM」をテーマに話をし
ていただいた。テレビCM制作を通し、
CG技術などが発展



していった過程や、
手掛けた作品を見
ながら、自身が「音楽」
を意識して制作し
てきたこと、クライ
アントとの意識のずれなどの話をテ
ンポよく紹介。続く第10回目の話
は、韓国東西大学の金鐘棋(キム
ジョンギ)教授。「アジアのデジ
タル・コンテンツ」をテーマに、今
後は、アジアから科学技術を使
った芸術を発信し、



アジア各国が一緒
になって「アジア
の時代」をつくるた
めの構想、問題な
どを、参加者と共
に語り合った。

メルプロジェクトからのお知らせ
公開研究会

2004年1月10日(土)「オルタナ
ティブなメディアの仕組みを構想す
る：視聴率問題を業界論としてで
はなく・・・」世間を騒がせたテレビ
視聴率の買収問題。そこからさらに
枠組みを広げ、オルタナティブなテレビ

のあり方を議論する。

2004年2月11日(水)「メルプロ
ジェクト・シンポジウム2004を批判
的に構想する」3月のシンポジウムの
内容について、公開で批判的に構
想する議論を展開。時間・場所は、い
ずれも午後3時~5時30分/情報学環
暫定建物2階会議室

シンポジウム

2003年度東京大学大学院情報学
環メルプロジェクト・シンポジウム
「メディア表現、学びとリテラシー
2004」2004年3月6日(土)・7日
(日)東京大学弥生キャンパス一条
ホールにて。今回で4回目となるこの
シンポジウムでは、東アジア各地
域のメディア・リテラシーの専門
家が一堂に会する予定。

問い合わせ先：水越伸助教授
shin@iii.u-tokyo.ac.jp

ADC出展報告

2003年10月14~16日メルプロ
ジェクトから派生したメディア&
デザイングループ「HIT!」とコ
ミュニティ・パブリッシングのメン
バーの協同により、第6回アジア
デザイン会議(ADC)に「PUB
LICing(パブリッキング)」を
テーマとして出展。メディアと
コミュニティに関する理論的かつ
実践的な新しい情報デザインの
モデルをアピールした。

表現系プロジェクト研究会報告

月1回程度、プロジェクト室で開
かれている表現系研究会、10月
は、理系

から芸術へと研究を進展させ、現在、
メディアアートの研究と実践を行
っている児玉幸子氏(電気通信大学
人間コミュニケーション学科講師)、
表現系から理系の技術を使った創作
活動を行っている竹野美奈子氏(ア
ーティスト)に話をしていた。大
学院時代に「磁性流体を用いたア
ート」で、共同作品を手掛けるこ
になった経緯、学位論文執筆の苦
労話、また、2000年から共同で活
動している“Protrude, Flow”プロ
ジェクトの紹介と、現役で活躍し
ている“表現系の先輩”の話は、
参加した学生にとって良い刺激
になったようだ。



情報学環ワークショップ始まる

情報学環・学際情報学府のスタッ
フの研究成果を、一般の方に紹介
するために、ワークショップを開く
ことになった。「社会との環」を
更に広げ、深めていく場として、
今後、年4~5回開催する予定と
している。第1回目は、12月6
日に開催。坂村健教授が、「ユ
ビキタス・コンピューティング
がもたらす21世紀」をわかりや
すく解説。また、馬場章助教授
は「大井町プロジェクトの現在」
を、プロジェクトに参加してい
る加藤雅之氏(大井町doカル
チャー・アグリ)、児玉俊也氏
(大井町銀座商店街振興組合常
理事)と共に報告した。



BOOKS

石田英敬教授著の本刊行

テレビ、広告、写真、アート、建築、サイバ
ースペース.....さまざまなメディアを通
してつくりだされる私たちの世界の意
味とは何か? ソシユールとパースを
源流として展開した記号の知によ
って、身のまわりにもまれる意味現
象のメカニズムを解き明かし、意味
批判力の獲得を提唱する書。
「記号の知/メディアの知：日常生活
批判のためのレッスン」/石田英敬
著/東京大学出版会



佐倉統助教授の本刊行

佐倉助教授とフリーライターの田端
到氏が、対談しつつ科学書の魅力
を探る、書評対談エッセイ集。取
り上げた本は一般向けのもが主
で、進化論や脳科学、バイオサイ
エンス、科学史、宇宙開発関係、
睡眠問題など、多岐にわたる。軽
妙な掛け合いと、満載の科学ス
ピリットが楽しい。
「科学書をめぐる100の冒険」/
田端到・佐倉統著/本の雑誌社



吉見俊哉教授(社会情報研究所)、水越伸助教授翻訳の本

19世紀後半、当時の人々が電
信・電話・ラジオという新しい
テクノロジーに抱いた夢と創造
力を明らかにする一方、電気が
家族や地域といった共同体の
あり方を組み替え、人種、地
域、性差などの社会差別をも
新たに生み出したさまを丹念
に描きだす。80年代に出版
されたメディア史を代表する
作品の翻訳。

「古いメディアが新しかった時：19世紀末社会と電気テクノロジー」/
キャロリン・マーヴィン著/吉見俊哉・水越伸・伊藤昌亮訳/新曜社

大井町プロジェクト(馬場章助教授研究室)の活動が本で紹介



平成14年度より始まった、ス
ーパーサイエンスハイスクール、
サイエンス・パートナーシップ
・プログラムで行われている
プロジェクトを報告。その中
で、大井町プロジェクトの活
動「大井町の子どもたちが、
日本科学未来館と出会う
プログラム」が情報学環の取
組みとして紹介されている。
「スーパーサイエンスス
クール」/井上徳之・毛利衛
著/数研出版



編集/発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 企画室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp URL: <http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>